

種まきの基本

1 種まきの土えらび

種まきには、根が伸びやすいように、きめが細かく、栄養分の少ない無菌状態の土が向いています。市販されている「種まき用の土」「種まき、挿し木の土」などを使うと便利です。

自分でブレンドする場合は、「ピートモス」「バーミキュライト」「鹿沼土」「赤玉土（小粒）」などを用いて、種の粒の大きさなどに応じて、配合を工夫してブレンドします。

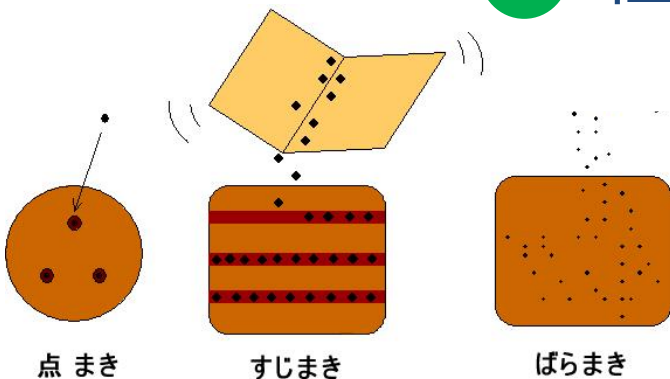
2 種まきの容器えらび

種まき専用のトレーや容器は、市販されているものを使うのが最も簡単ですが、自宅にある容器を活用することもできます。種まき容器としては、家庭にあるさまざまなものを使うことができます。イチゴパックや卵パックなどのリサイクルも可能です。いずれも、底から水が抜けるように、千枚通しなどで穴を開けて使います。店頭で販売されている花苗のビニールポットに土を入れて使うことも可能です。



3 種のまき方

上記で選んだ容器に種まき用の土を入れて、いよいよ種をまきます。種の粒の大きさによって、まき方を変えます。大きな粒（指でつかみやすい）の場合は、点まきにします。土に指か割りばしなどで軽く穴をあけて、種と種の間隔をあけて、まきます。小さな粒の場合は、土に筋を付けてすじまきにしたり、土の面全体にばらまくようにしてまきます。



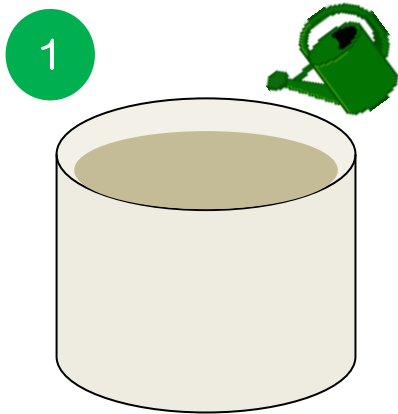
4 種まき後の覆土（土をかけること）

種には発芽するために光が必要なものと、不必要なものがあります。

- ◎好光性種子…光に反応して発芽する種。光に当たらないと発芽しないので、土を厚くかけすぎないように気を付けます。
- ◎嫌光性種子…光が当たるとうまく発芽しない種。種をまいたあとは、種が隠れるように確実に土をかける必要があります。

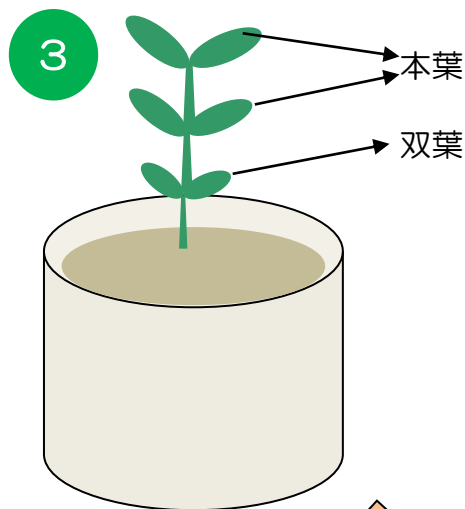
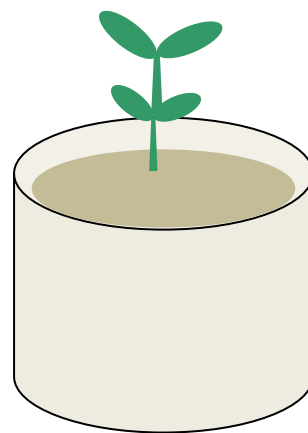
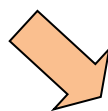
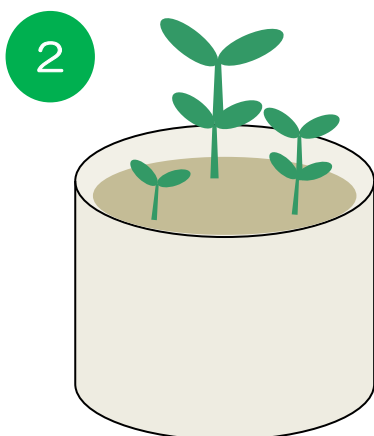


種まきあとの 育てかた

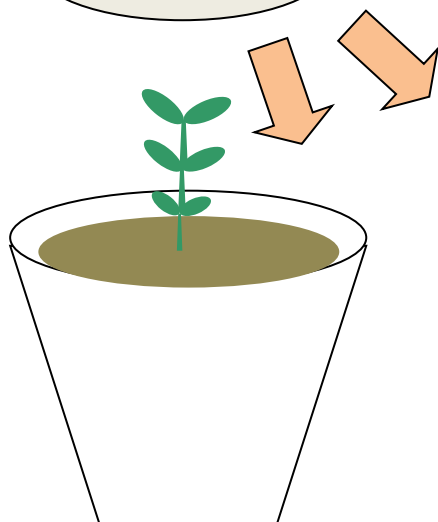


芽が出るまでは、土が乾かないように、水をあげます。

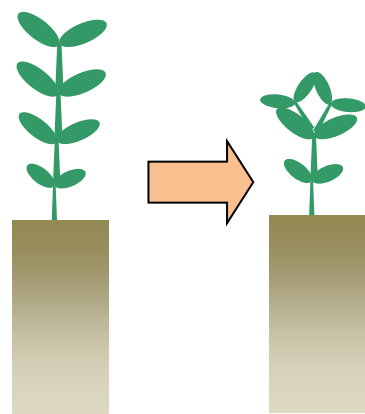
芽がでたら、土が乾いてから水をたっぷりあげます。芽がいくつか出てきたら、その中から一番元気な芽を1本だけ選んで残し、ほかの元気のない芽を取り除きます。(花の種類によっては、間引きしないで2~3本一緒に育ててもよく育つものもあります)



本葉が4枚位に育ってきたら、地面もしくはプランターに植え替えます。日当たりのよい場所を選んで植えてください。植えた土が乾いたら水をたっぷりあげて、花が咲くまで育てていきます。



4



本葉が8~10枚になったら、先端を摘み取ります。そうすることで、わき芽が伸びてきて、花の数が増え、株がこんもりと育ちます。